

パラダイム・シフトの時代に

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

新年は過ぎ去った日々を一新する格好の機会となります。読者の皆さまもさまざまな希望や期待や抱負を抱いておられることでしょう。

東日本大震災以降、世情は政治的にも経済的にも波乱含みの様相を呈しています。雪崩を打つような政権交代はその象徴といってもいいでしょう。われわれは一体どこへ行くのかという問いかけに対する回答はいまも不透明なベールにつつまれているというのが率直な印象です。

しかし羅針盤のない航海がたちまち座礁してしまうように時代の趨勢をそれなりに見極めないと新たな一步を踏み出すことはできません。企業経営もその例外ではないと思います。

価値観＝世界観の革命

混沌とした世相を読み解く有効な概念のひとつとしてパラダイム論があります。パラダイムはもともと語形変化のパターンを意味する文法用語でした。それを科学論のキーワードとして劇的に変換させたのが科学史家のトーマス・クーンです。クーンが1962年に刊行した『科学革命の構造』は空前の問題作として論議的になり、科学のみならず思想、経済、ビジネスなどのあらゆる分野で応用されるようになりました。

パラダイムとは一般的に「一時代の支配的な物の見方」（『広辞苑』）と解釈されています。より

厳密にいうと、ある時代を牽引する規範的な物の見方・考え方・捉え方と規定することができます。クーン自身は「一時期の間、専門家に対して問いや答え方のモデルを与えるもの」（『科学革命の構造』）と定義していました。

ある時代の規範的なパラダイムは地殻変動ともいうべき革命的な変化を引き起こすことがあります。これをパラダイム・シフトと呼びます。

パラダイム・シフトは単純な進化の延長ではなく既存のパラダイムから新たなパラダイムへ非連続的に転化するというのが特徴です。既存のパラダイムでは対処できない変則的な問題が蓄積してくるとそのパラダイムに危機が生じ、混乱を伴いながら新たなパラダイムが登場します。それは規範的な価値観＝世界観の一種の革命といってもいいかもしれません。

閉塞を打破する独創性

科学史でみると天動説から地動説への転換はパラダイム・シフトの典型的なケースです。宇宙の中心に地球が静止しており、そのまわりを天体が動いていると考えるのが天動説です。古代ギリシャのアリストテレス哲学などで提唱され、2世紀に古代ローマの天文学者プトレマイオスが体系化したと伝えられています。

天動説は神が地球を宇宙の中心にしたという

キリスト教神学に合致するものとして中世ヨーロッパの宇宙観を支配しました。文字どおり規範的なパラダイムとなったのです。

15世紀に入って大航海時代が始まると天文学による観測技術が進歩し、天動説では説明できない事態が明らかになってきました。パラダイム・シフトの始まりです。

16世紀になってポーランドの天文学者コペルニクスが太陽を中心として地球などの惑星が回転しているという地動説を唱えます。地球が宇宙の中心であるという聖書の記述を覆すコペルニクスの考えはきわめて衝撃的で現在でも世界観が根底から変わる局面を「コペルニクスの転回」と呼んでいます。

地動説は17世紀にイタリアの天文学者ガリレオによって科学的に裏づけられます。ガリレオは望遠鏡がたんなる高級玩具と見做されていた時代に初めて天体観測に使用し、木星のまわりを動く4つの衛星など数々の発見をします。しかし天動説に固執する学者や教会から迫害され、宗教裁判＝異端審問によって軟禁生活を強いられます。「それでも地球はまわっている」という有名な言葉はパラダイム・シフトの先駆者であるガリレオの栄光と悲惨を如実に物語っています。

科学史におけるパラダイム・シフトはこれ以降もニュートンの万有引力の法則、アインシュタインの相対性理論、ボーアやハイゼンベルクによる量子力学などを通じてドラマティックに展開されていきます。彼らに共通するのは既存のパラダイムに囚われず自由な発想をしていたということでしょう。ガリレオの功績も当時の最先端技術である望遠鏡を偏見なく駆使することによってもたらされました。パラダイム・シフトは閉塞した状況を打破する独創性と密接に結びついています。

過渡期を超える主体へ

現在のパラダイム・シフトはたとえば持続可能な社会、低炭素社会、循環型社会といった一連のビジョンに反映されています。簡潔にいうと限りある資源＝世界のなかで将来の世代の利益を損なわない生きかたを選択していくということです。

これを環境と経済の両立と言い換えることもできます。

東日本大震災における福島第1原発事故は日々あたりまえのように使っているエネルギーが決して無限ではないことを悲劇的なかたちで実証しました。その反省として太陽光、風力、水力などの

再生可能エネルギーがクローズアップされています。かつてエネルギー危機を予言したイギリスの経済学者シューマッハーが1973年に唱えたスモール・イズ・ビューティフルというフレーズが甦ります。

震災による痛苦的な経験は物質的な面にとどまらず、命より尊いものはないという人間的な連帯感を生みだしました。安全性を軽視した科学万能主義や格差社会を助長する市場原理主義はもはや限界を迎えています。

こうしたなかで人々のライフラインを根底から守り、支え、育てているわれわれの業界はパラダイム・シフトの中心となる主体となるポジションにいるとわたしは思います。業界のビジネス分野である水も空気もエネルギーもまさに人々の運命を左右する生命線としてこの時代の焦点となっています。

パラダイム・シフトの時代は中心と周縁が反転し、それまで異端と見做されていたものが最先頭に躍り出るといって「コペルニクスの転回」が起こります。願わくば率先してパラダイム・シフトをリードできるような進取の気性を発揮したいものです。

現在はパラダイムの転換の過渡期であり、これからは思いがけない社会的混乱が予想されます。しかし来たるべき時代は幾多の試練を超えてわれわれの時代になるとわたしは信じます。

弊社も微力ながら皆さまの新たな飛躍を願い、真に価値のある報道に汗を流します。

科学革命の構造

トーマス・クーン
中山 真実

みすず書房